

紙つて

「イドラウリコ (idraulico) を呼ばなくちゃ」

イドラウリコとは水道管工のこと。イタリアで暮らして、この単語を初めて知った。

歴史地区には築数百年の建物が少なくない。外観を修復・保存しつつ、内部を改装して人々は快適に暮らしている。近代の生活インフラの水道・電気・ガス等は、限られたスペースに工夫して設置されている。

キッチンやバスルームの水回りにトラブルがあると、イドラウリコに来てもらう。ところが、石造りの建物だから、水道管の造作となると壁を壊すことになる。漆喰壁に穴を開けるのは、さぞ大ごとだと思うが、

イドラウリコ

武田 好

コンコン、ガリガリと始終どこからか壁を削る音が聞こえてくる。

建物同士が軒を連ねて縦横に一体化した町は、個人宅の修繕も、上下・左右の人々の理解と協力がなくては進まない。世界遺産の町の保存は、住民同士の密なコミュニケーションと助け合いで成り立っている。

だがイドラウリコはすぐに来てくれないし、修繕には時間がかかるし、壁には穴が開いたままだし…。住人たちは話題に事欠かない。

家に手を入れながら暮らすスタイルが根付いていて、依頼主のセンスに応える腕のよい職人の出番となる。誰に頼むかは隣近所が情報源。水道に限らず、住居の規模に合ったよい暮らしを求めて調える。まるで気長に待つことを楽しんでいるかのようだ。
(静岡文化芸術大学教授)

2020.4.18

2020.4.18

中日新聞 (夕刊) P.1